

## 職業決定と就職による適応上の問題

教育学部 一丸 藤太郎



誰でも生活環境が変化することにより、適応上の種々の問題や克服しなければならない課題が生じる。こうしたことは、一時的なものであったり、長時間にわたるものであったりする。また、比較的容易に乗りきれぬものであったり、あるいは強いダメージを受けてダウンしてしまうこともある。こうしたことには、主にその個人の要因と新しい生活環境の要因、さらにその両方の相互作用といったことが考えられる。

誰でも生きていく上で程度の違いはあれ、新たな生活環境へ移行していくことは避けられないし、そのたびにストレスを受けたり、克服することで人として成長していく。こうしたことはまた、外的な生活環境だけでなくその人自身の変化、例えば児童期、青年期、成人期、中年期といった変化にもあてはまることでもある。

心理的障害や不適応は、このような外的、内的移行の節目に生じやすいのであるが、大学を終えて就職するということはこのような節目の一つであり、多大な心的エネルギーが求められる。もちろん大多数の人は、このような状況をそれぞれのやりかたで乗り越えていくのであるが、不幸にしてそう出来ないこともある。ただここで乗り越えるといっても、それは「完全」ということではなく、「ほぼよい」程度にとということである。

就職するまでも誰でも、なんらかの移行体験はしている。例えばそれは、親の転勤に

伴う転校、家族構成員の変化といった外的なものであったり、児童期から青年期といった内的なものだったりする。しかし、就職の場合には、それまでの移行体験とは異なった特有の様相が含まれている。

まず第一に、幼稚園から大学までは比較的穏やかで連続性のある変化であるのに対して、学生から職業を持った社会人への移行は、ある面では非連続的で、急激なものであると言えよう。特に学歴偏重社会で、受験勉強にだけ明け暮れた人にとっては、この移行は大変なものではないだろうか。

この数年、我々心理臨床家の所に就職して2、3年以内に職場不適応で相談に来られる人のなかで次のような人が増えてきている。それは、いわゆる「一流大学を優秀な成績で卒業した」ものの就職により急激に不適応に陥る人たちである。

彼らの語ることを聞いてみると、それは最近のほとんどの学生が多少とも感じ、体験していることを拡大鏡で写し出しているようなものではないかと思う。

彼らが不適応に陥る直接の契機は、多くの場合上司や少し年長の先輩からのちょっとした注意や叱責である。まだ新入社員であり、なにもわかっていないのにもかかわらず、自分が何かを出来なかつたり、知らないことを指摘されることに彼らは弱い。ちょっとした注意でも、自分の全存在が否定されたように感じてしまうようである。

いつでも「優秀な出来る子」として認められてきた彼らにとっては、注意されたり叱責されたりすることはありえないことなのである。それまで自分が同年齢の人達のグループ

に属していたのが、就職により年齢、経験、知識の異なった人達と一緒に働いており、自分はまだ全くの新米であるということがなかなか飲み込めないようである。

彼らは、「ほほよい」ということが難しい。「完全に間違いなく」仕事をやろうとするし、他の人たちもそのようにすることを期待している。そのために多大な時間を費やしたり、また現実的に不確定な要素の強いものでも「完全」にやろうとして、不全感に陥ってしまうこともよく見られる。このような時の彼らの様子は、まるで勉強を一生懸命やっているような感じである。

また彼らには、大学までは勉強で良い成績をあげることが唯一だったように、職場には仕事だけしかないかのようなのである。対人関係上でのトラブルが生じる直接のきっかけが、しばしば就業時間外のインフォーマルな会合、例えば先輩や上司と飲みに行ったりするような時がよくあるのも彼らの特徴である。

このことと関連して、彼らは話されたことを文字どおりにだけ受け取りやすいということがあげられる。そのために先輩や上司との行き違いを生じることもよく見られる。

こうしたことから、彼らは、「完全な立案書」が出来ないために出勤出来なくなったり、不全感に陥ったり、自分を「優秀」と認めてくれない先輩や上司に敵意を抱いたり、被害感に苦しんだりするようになってくる。

このような彼らの話を聞いていると、確かに生徒、学生としては、「よく出来るし、問題もなく、優秀だった」のに違いないと思うし、知的能力にも恵まれている。また、親や教師からそのように評価もされてきている。実際に彼らは、まじめであり、懸命に生きてきているのも確かである。しかし、彼らの陥っている不適応の様相は、非常に極端ではあるけれども学力偏重という現在社会で生きてきた者の歪みが示されているのではないだろうか。

就職はまた、青年期の最も重要な発達課題

でもある自我同一性の達成という内的移行とも密接に結びついている。しかも自我同一性の達成は、変動する現在の社会では、特に高学歴者にとってはますます困難になってきており、大学を卒業するまでに自分の職業を決定できない者も稀ではない。そのために職業を決定せずに、いわゆる「フリー・アルバイター」としてモラトリアムを維持しようとしている者もいる。しかしこれは、それだけで不適応と言えるものではなく、若者達が自分自身の人生を彼らなりに真剣に模索しているという積極的な側面もあるのではないかと考えられる。

また、職業を決定出来ない人たちには、自分にあると考えられる可能性すべてを維持しておきたい者もいる。彼らにとっては、なにかある職業を選ぶということは、その他のすべての職業をあきらめることになり、そのことに我慢ならないのである。こうした人たちにしばしば見られることの一つは、頻回の転職である。もちろん転職そのものが問題というのではなく、彼らが自己を限定しないままでいようとし、その職業にコミットしないことで成長できないのが問題なのである。

職業決定と就職による適応上の問題ということで、学校という守られた社会から、職場へとという外的な移行ということと、自我同一性の達成という内的な移行という二つの側面をあげてみた。移行がスムーズに行われるためには、十分な準備がなされなければならない。大学教育も含め教育は、職業を得て社会人になるための準備期間と考えられている。しかし、学校と職場ではあまりにも多くの面で隔たりが進んできているのではないだろうか。また、自我同一性についても、その達成はますます困難になってきているようである。しかし、こうしたことすべてが、就職により不適応を生じさせるということでもないようである。若者達の一見不適応とも見える真剣な模索から、新たな職業観や生きかたが生まれてくるのではないだろうか。